

# 蝦夷地と近世北奥羽

## —— 多様な交流と蝦夷地観 ——

長谷川 成一

もくじ

はじめに

### 一 絵図に見る近世の北海道

—— 近世前期を中心に ——

### 二 安藤昌益の蝦夷地観

### 三 文化四年（一八〇七）「北の黒船事件」

—— 北奥羽各藩の蝦夷地出兵 ——

### 四 北奥羽と蝦夷地との交流

### 五 民衆の蝦夷地観

—— 南部の三浦命助に見る ——

おわりに

はじめに

ご紹介いただいた長谷川です。しばらくの間おつきあいを願いたいと思います。

本日は「蝦夷地と近世北奥羽——多様な交流と蝦夷地観——」と題してお話し致します。「文書でみる北海道史講座」という講座名ですが、本日は文書というよりは、むしろ様々な絵図や、その他文書以外の資料も使ってお話ししたいと思います。

さて、皆さんは、ルーツは道外、お生まれは北海道で道内にお住まいの方が多いと思いますけれども、私は秋田県の南側、日本海に面した本荘市ほんじょうの出身です。しかし、私の先祖、本家は、現在は札幌にあります。なぜかと申しますと、先祖は明治維新まで城下町本荘の町役人を務めていた

のですが、維新の混乱時に時代に取り残され、ある意味では食えなくなりました。そこで、何人かいた兄弟、長男をはじめ男系の息子たちが本荘の港から蝦夷地に行ってしまう、一番末の娘が長谷川の名跡を継いで現在に至ったと、

そういう話を祖母から聞いております。ですから、私のルーツを探るには北海道に來なければならぬという状況でして、皆様とは逆方向です。ただし、いつでしたか、北海道の本家の方が本荘に訪ねて來られた時、母に「おまえの顔は長谷川の顔じゃない。訪ねて來られたご本家の方が、あれが本当の長谷川の顔なんだ」と言われまして、よくよくそのお顔を見ると、父、それから私の祖母と非常に良く似ているという印象がありました。

当時の人々にとって、津軽海峡は「しょっぱい川」と呼ばれていましたけれども、この「しょっぱい川を渡る」という表現の中には、いとも簡単に越えられるという意識が含まれていたのではないかといったことも、自分のルーツ、先祖を訪ねる中で、いろいろと考えさせられたものでした。本荘市については、後でまた触れたいと思います。

私のルーツの話を致しましたが、この講座では、支配者側の蝦夷地に対する捉え方と、民衆の側からの蝦夷地に対する考え方、そのあたりを中心にお話ししていきたいと思

います。

## 一 絵図に見る近世の北海道

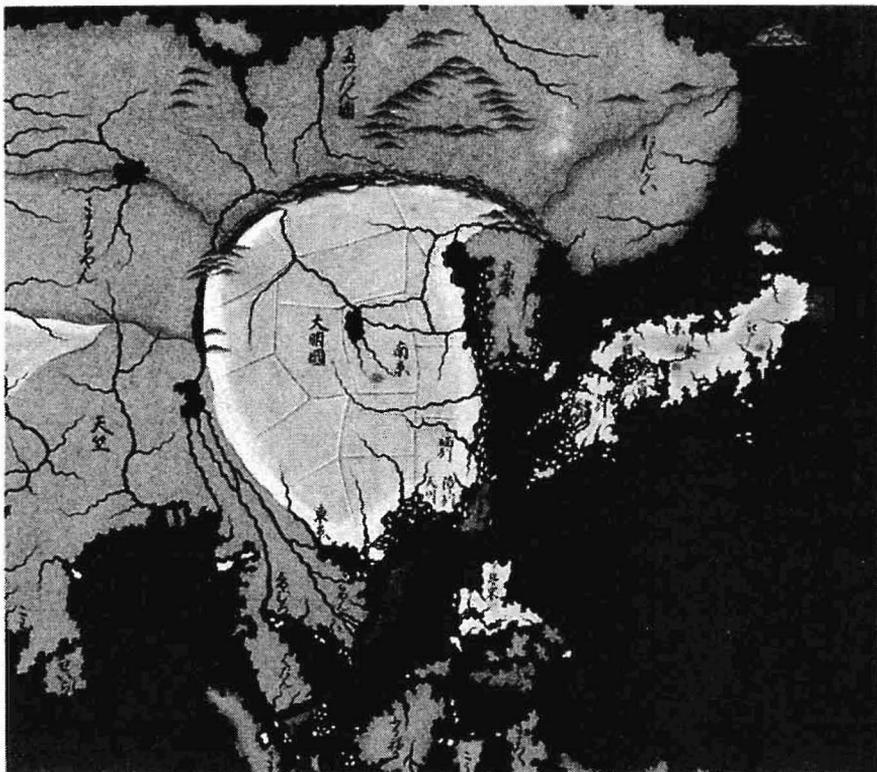
### — 近世前期を中心に —

図1の世界図・日本図屏風をご覧ください。この絵図自体は屏風仕立てになっています。これが当時の世界観の中で描かれた日本ですが、津軽海峡が一番北の端に位置しており、日本をどのような形として想定していたかが伺われます。

では、この絵図が一体いつの時代のものであるのかということになりますと、意外と考証が難しいのですが、いくつかの手がかりがあります。この絵図にはたくさん地名が記されていて、その地名からある程度類推ができるのです。世界図部分には、当時のヨーロッパ人の知識を取り入れて、「大明國」あるいは「だったん國」という地名も記されています。そして、「エゾ」もあります。「エゾ」は、日本から分かれて描かれております。

ただし、この「エゾ」は、かなり抽象的な概念に基づいたものであろうと想定されます。といいますのは、秀吉の扇面図や当時の絵図は、大陸の沿海州のあたり

(世界図部分)



(日本図部分)

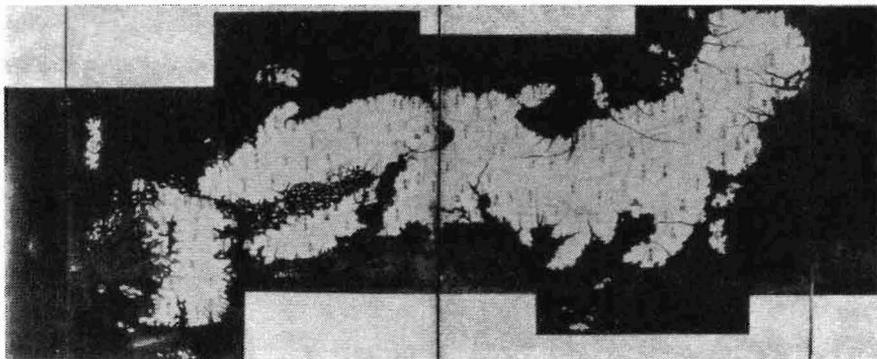


図1 世界図・日本図屏風 個人蔵  
〔出典〕堺市博物館『図録 堺と三都』1995年

に、「エゾ」という地名を付して描かれています。中世には、「蝦夷ヶ島」、「夷島」と記されていました。申叔舟の『海東諸国紀』（一四七一年成立）の図には「夷島」とありますけれども、田中建夫先生のお話によりますと、「夷島」と呼ばれた島は想像上の島であるということです。例えば「女護島」であるとか、そういったものと一緒に描いてあるのですから、そういう点では「夷島」も想像の産物であろうというのです。海保領夫さんとしては、『海東諸国紀』の図を、北海道が初めて描かれたものとして評価されましたけれども、田中先生は違う見解でした。ここに「エゾ」と書かれているこの島も、恐らく中世以来のそういう考え方の一つだったのだろうと思います。

さて、この絵図の作成年代の手がかりですが、「おらんかい」という文言が見えます。この文言は、御存知の方もいらっしやると思いますが、文禄元年（一五九二）一〇月、朝鮮に出兵していた加藤清正から秀吉に情報が入ります。オランカイにおいて朝鮮の王子を二人生け捕りにした（捕虜にした）というものです。秀吉はこのことに欣喜雀躍して、朝鮮侵略はほぼできたも同然、将来は北京まで押し寄せて天皇を北京におき、自分は天竺まで攻め上ろうという意志を表明します。オラン

カイという地名が盛んに使われたのは、今申しました文禄元年から二年のあたりです。ですから、この絵図自体は、文禄元年以降、一六世紀末の情報をもとにして描かれた屏風絵であると考えられるのです。

そこで、絵図の日本図部分ですけれども、津軽海峡以南が日本という概念で描かれている。従って蝦夷は、日本の概念の中に入ってこないということになります。豊臣政権が考えていた日本の枠組みは、実はこのようなものであったのです。

さて、徳川政権は、慶長一〇年（一六〇五）に初めて国絵図の徴収を行います。そして全国から集めた国絵図、それを慶長国絵図といいますが、一つにまとめまして、日本の全体像を表したのが「日本総図」です。これは何枚かに分断されていますが、現在山口県文書館に所蔵されています。そのうち、東北地方を描いたのが図②「奥州羽州全図」です。この絵図は『青森県史 資料編 近世1』（青森県 二〇〇一年）の中の、「近世国家のなかの北奥」口絵にも掲載していますので、詳しくはこちらをご覧ください。

そして、この「奥州羽州全図」より上、すなわち北は描かれていません。慶長一〇年、徳川家康の政権になってから初めて作成された国絵図の中に、蝦夷・夷島は入っていない

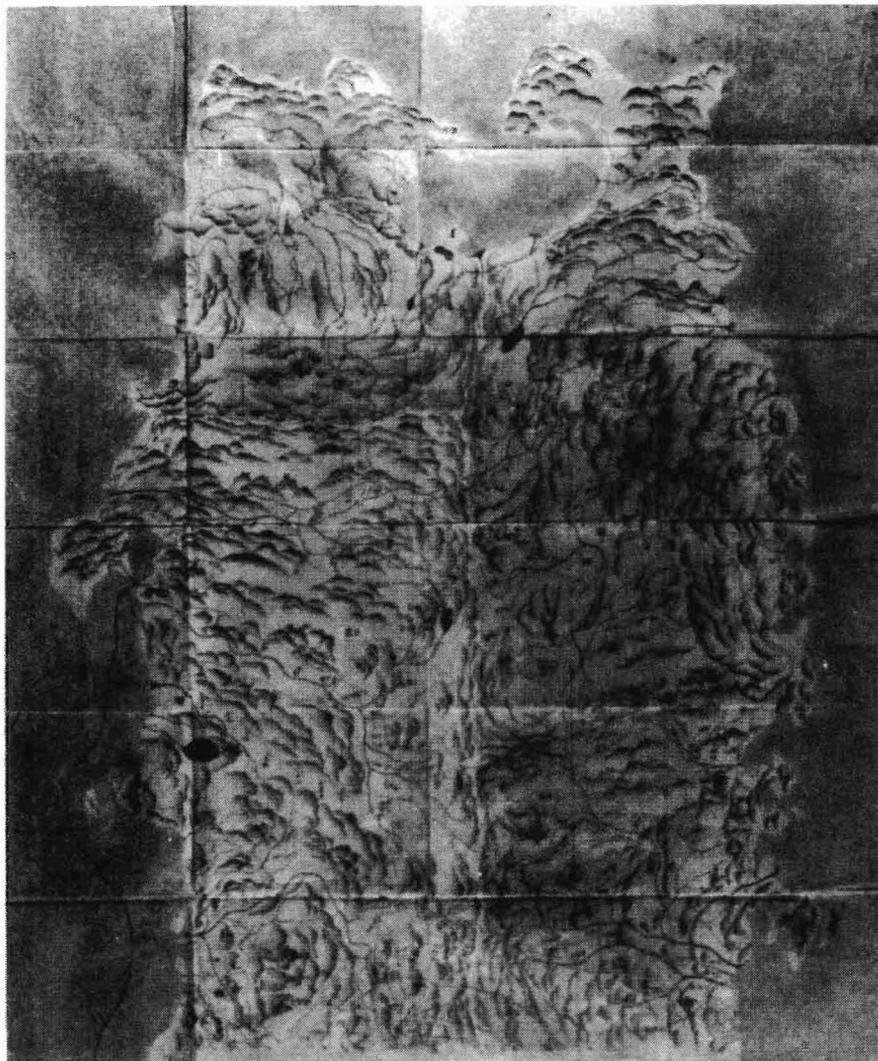


図2 奥州羽州全図 山口県文書館蔵  
[出典] 青森県『青森県史 資料編 近世1』2001年

い。豊臣政権下の一六世紀末、それから家康政権に入った慶長一〇年、少なくともその頃までは、蝦夷は日本の中にまだ入っていないことが、図示的にも判明します。

次に、チースリク先生が翻訳した『北方探検記』の中の一節をご覧下さい。以下は、アンジェリスという宣教師が蝦夷に渡ったときの文言です。

〈資料1〉アンジェリスの第一蝦夷報告

一六一八年(元和四)

私がパードレであることを確かめてから、乙名は松前殿へそれを報告した。その後、殿は、その馳走をしたキリシタンたちに対し、パードレが松前へ来るから、お前たちが気持ちよいと思うところへ泊まってもらい、馳走をしてあげよ、と言った。そして彼自身はそのために町の検断に指示して、パードレの松前へ見えることは大事もない、なぜなら天下が彼らを日本から追放したけれども、松前は日本ではない、と付け加えた。

(日、チークリス編『北方探検記』吉川弘文館 一九六二年)  
アンジェリスがやってきた時の状況といえますと、一六一八年(元和四)のことですが、彼は秋田から船で日本海側を北上して、深浦を経て蝦夷地へと着きます。到着したところは、おそらく現在の上ノ国町であろうと言われている、

そこから陸路松前に入って来ました。

なぜアンジェリスが北の蝦夷地を目指したかということをつけ加えておきますと、御承知のとおり、豊臣政権以来、日本においてはキリスト教への禁圧が加速してまいります。日本の南側、すなわちフィリピンやマカオからキリスト教の宣教師が入ってくる余地がほとんどない、そういう大変厳しい状況に置かれているわけです。従って、北方世界が、比較的日本の領主権力の及び難い地域であるといった情報は当然あったでしょうから、北側から日本に入って来れないものだろうか、すなわち宣教師が、ユーラシア大陸を通って日本に潜入し、布教することが可能かどうか、これがイエズス会としても大変重要な問題であったのです。

それでは、なぜ北側から入って来ようという気持ちになったのかといえますと、先程申し上げました朝鮮侵略の問題と、これは密接に関わります。秀吉が、加藤清正からオランカイに到達したとの報告を聞いて、欣喜雀躍したという話を致しました。『清正記』という資料の中には、なんとオランカイの附近に蝦夷がある、と記されています。従って蝦夷を経由してオランカイに入ることは大変簡単である、と。すなわち、対馬を経由して朝鮮半島を攻め上ってオランカイに到達するよりは、オランカイと蝦夷が近い



図3 アンジェリスの蝦夷地図(部分) イエズ会本部所蔵  
 [出典] H. チークリス編『北方探検記』吉川弘文館 1962年

のであれば、北側から行けばすぐだというのです。現代から見ると当然間違っているのですが、当時一六世紀末から一七世紀の初頭にかけて、蝦夷とオランカイという地名を媒介として、そういった地理情報の人々の脳裏に刷り込まれていったと思われます。アンジェリスは、こうした北からのキリスト教の流入が可能なかどうかを確認に行ったのです。それで、『資料1』『北方探検記』に見えるように、「パードレ(宣教師)の松前へ見えることは大事もない」という。これは、宣教師が松前に来ても大丈夫ですよ、という意味です。町検断すなわち町年寄ですけれども、アンジェリスの正体を見抜いて、パードレのあなたがここに来るのは一向に差し支えありませんよ、と。なぜなら、天下が彼らを日本から追放したけれども、すなわち徳川將軍家は日本からパードレたち宣教師を追放したけれども、松前は日本ではないのだから、ここでキリスト教を布教することは何ら差し支えがな

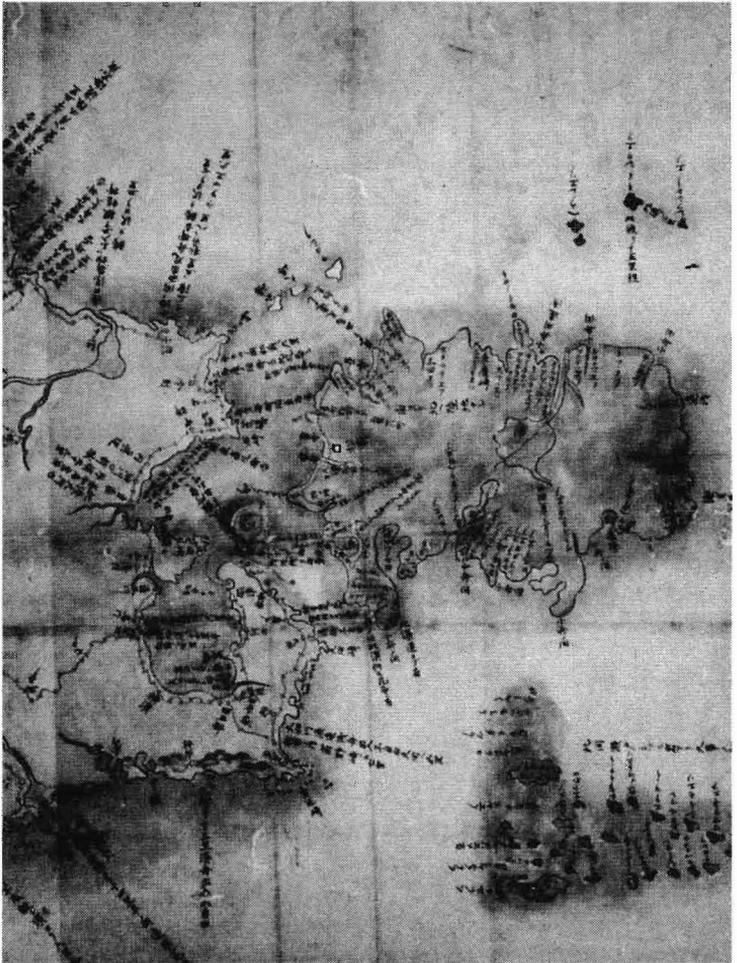


圖4 正保日本図(部分) 国立歴史民俗博物館蔵  
〔出典〕青森県『青森県史資料編 近世1』2001年

いということ。アンジェリスはその後松前から帰る途中、弘前付近で、流刑に処せられたキリシタンたちに秘蹟を授けます。そして、日本でも有数の厳しい関所である「津軽の関」、これは碓ヶ関を指しますが、ここを越えて秋田領に抜け、南部の方へ帰りました。

またアンジェリスは、蝦夷人や松前にいた様々な人々から情報を収集し、図3にあるような蝦夷地図を作製します。地図中に「Yezo」とありまして、蝦夷を描き込んでいます。皆さんもお気づきだと思いますが、この地図にみえる日本の中で、下北半島と松前の部分が、比較的大きな形をしています。そして北海道も、大変巨大な姿で描いておられます。これは、松前で得た情報に基づいて描いた図です。しかもこの図は、松前は日本ではないという前提で描いているわけです。一六一八年(元和四)の段階では、権力側がどう捉えたかは別にしまして、まだ当時の人々は、松前を日本と考えていなかったことは間違いないと思います。その後、カルヴァーリユという宣教師が再度松前へ行った時には、もうすでにキリスト教の禁圧は相当きつくなっています。まして、このような話を聞くことはもうありませんでした。それでは、日本の中に北海道が入り込んでくる、少なくとも幕藩領主が、北海道を日本の国家と正式に認定したの

はいつの時期か、ということが次に問題になります。

権力側が、基本的に日本の中に松前、蝦夷地を取り込んだのは、図4の「正保日本図」です。北海道、樺太、千島列島とも、こうした形で日本図の中に取り込みました。この図は現在、国立歴史民俗博物館に所蔵されていて、許可を得まして、これも『青森県史 資料編 近世1』の中に付図として入れました。皆さんご覧になってみて、これは一体何なんだとお考えになると思います。秋月俊幸先生は、著書『日本北辺の探検と地図の歴史』(北海道大学図書刊行会 一九九九年)の中で、この地図の蝦夷地部分について、実際に計測したものではなく、当時の人々が持っていた様々な情報に基づいて描かれたものであると述べています。正保国絵図を作製、提出させるにあたって、江戸幕府は各大名に詳細なマニュアルを渡しますが、蝦夷地部分はそのマニュアルに全く沿わないで作られています。おそらく計測するということもなかったし、いわゆる千島アイヌ、樺太アイヌ、それと蝦夷地にいるアイヌ民族から情報を聞いて作った鳥瞰図であろうと、そのようにおっしゃっています。私もその見解に賛成です。

この地図、よく見ますと蝦夷地の中央部を南北に分ける線が横に引かれています。南側が和人地で、北側が和人

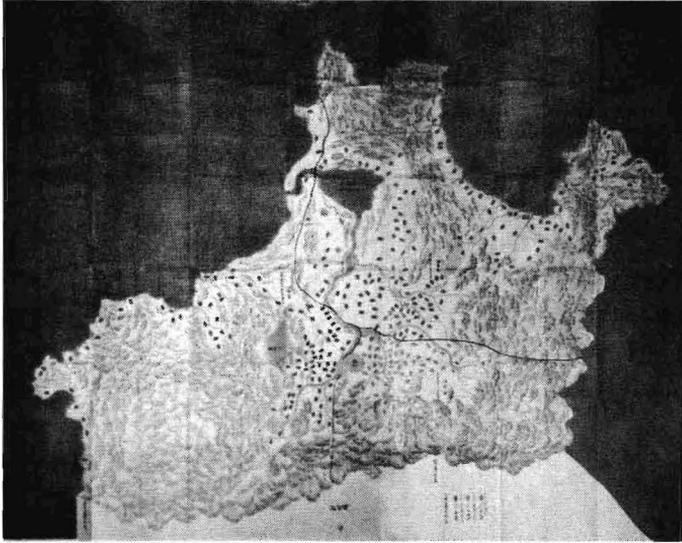


図5 陸奥国津軽郡之絵図（部分） 青森県立郷土館蔵  
〔出典〕青森県『青森県史 資料編 近世1』2001年

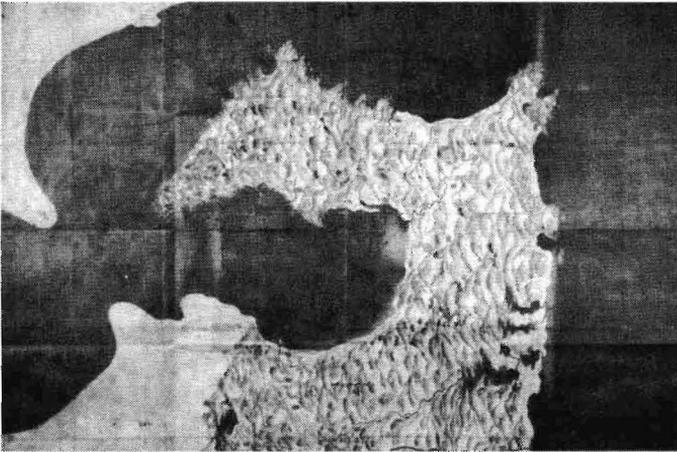


図6 南部領内総絵図（部分） 盛岡市中央公民館蔵  
〔出典〕青森県『青森県史 資料編 近世1』2001年

地外ということになります。道南を中心とした和入地が巨大に描かれています。

蝦夷地部分の絵図は、今申しましたように大変不正確ですが、幕府のマニユアルどおりに作った絵図というのはこんなものではありません。例えば、図5「陸奥国津軽郡之絵図」は、津軽郡の正保国絵図で、弘前藩領の右側東部側半分を示しています。蝦夷地への渡海の有様も描かれていて、この図もそれほど正確ではありませんが、少なくとも先程の蝦夷地の絵図よりはかなり良くできています。蛇足になりますが、この地図中、夏泊半島と津軽半島の部分に、津軽アイヌが住んでいた「狄村」というのも表記されていて、本州アイヌが居住していたことがこれによってわかります。この絵図も、『青森県史 資料編 近世1』の付図にあります。

南部領の国絵図、図6「南部領内総絵図」も、一緒にご紹介いたします。やはり下北半島から蝦夷地への航路が描きこんであります。皆さんもご承知のとおり、下北半島はアイヌ語地名の大変多いところで、アイヌ民族の居住もおそらくあっただろうと想定されております。この下北半島の先端部しもぶらの下風呂に、佐賀さんというお宅があります。佐賀家というのは、近代に入ってから留明に漁場を持ちましたが、

そのお宅を青森県史近世部会が調査させていただいたときに、元禄期頃の村絵図を発見しました。その絵図中には、「狄屋敷」という文言が出てきました。それによってアイヌ民族の居住を確認できました。しかし、村絵図より前に作製された「正保国絵図」の南部領内には、狄村は描かれていません。すなわち、津軽側のアイヌ民族の把握の仕方と南部側のアイヌ民族の把握の仕方とは、異なっていたということがわかります。

さて、この「南部領内総絵図」の下北半島西側にある海面部に、少し見づらいますが渦巻きが描かれています。この「紫丹巻」と記されています。津軽海峡にはこのような難所があるということ、描いてあるんですね。一方の「正保日本図」の中にも、津軽海峡に渦が巻いているところがあります。従って南部領の国絵図「南部領内総絵図」、それから津軽郡の「陸奥国津軽郡之絵図」など、これらの情報を「正保日本図」の中に入れたはずですが、ですから、この「正保日本図」の蝦夷地部分についても、おそらく現物があつたであろうと想定されます。しかし現在のところ、我々も青森県史編さんの調査の過程で蝦夷地の原図を相当探しましたが、残念ながら発見することができませんでした。

しかし当時の幕藩領主が、このような形で蝦夷地を国家



図7 『統道真伝』表紙 慶応義塾図書館所蔵  
 【出典】盛田稔・長谷川成一編『図説青森県の歴史』  
 河出書房新社 1991年

の枠組みの中に組み込もうとして、国絵図の中に描きこむ作業が行われたことが、「正保日本図」によって判明しました。

さて、いよいよ、蝦夷地が国家の中に入り込んでくるということになりました。それでは、国家の中に入り込んできた蝦夷地、蝦夷地の人々を、当時の人々はどのように認識していたのかということを、民衆レベルの観点、思想的な側面からお話したいと思います。

## 二 安藤昌益の蝦夷観

安藤昌益と申しますと、E. H. ノーマンが「忘れられた思想家」(『ハーバート・ノーマン全集』第三巻 岩波書店 一九七七年所収)で紹介して、我々には大変なじみのある思想家として捉えられてきました。近世中期、青森県の八戸市に在住した町医者です。安藤昌益は、とにかく当時の封建的な支配、封建的な国家の支配に対して、アンチテーゼを唱えた人物として知られています。

武士は働かない、百姓は「直耕」(ちきう)をする、「直耕」をしない無為徒食の輩が武士なのだ、そういう言い方をします。世の中で働かないで日常を過ごしている人間と、それから働いたものをしぼりとられる者とがいるという搾取の構造があるのだと言います。従って、「直耕」をしない武士は、とにかくけしからん存在であり、単なる消費者にしかすぎない、という見方をします。

近年、いろいろ研究が進みまして、この安藤昌益の著作だけから見れば、ものすごい革命家のような雰囲気になってまいります。昌益は八戸藩の藩日記という正式な記録の中に一度だけ出てまいります。その内容をご紹介しますと、

八戸城下で開催された祭礼の際、藩士たちが熱射病で倒れたため、藩は昌益にその治療を依頼、治療にあたった昌益は藩から褒美の銀をもらった、というものです。別に褒美をもらったから良くないというのではなく、このように昌益は八戸藩の家老以下、上級武士とのつきあいが深かったようです。上級武士とのつきあいが深いというのは、昌益が書いているものと矛盾するような感じもします。

それはそれといたしまして、昌益の著作『統道真伝』(図7)の中に、蝦夷地や蝦夷人に対する見解が述べられています。

#### 〈資料2〉『統道真伝』現代語訳

東夷国(蝦夷あるいはアイヌ国)

#### 東夷国の気行と風物

東夷国は、日本の北方、海上わずかに十里を隔てて松前の島があるが、そこからさらに北方に陸の続くこと五百余里。それが東夷の地である。その気行は、世界の北端であるので大山が重畳して、地はいたって厚く、寒気がはなはだしい。五穀の類は実らず、大河が数多く流れ大木が茂り、果実を結ぶ。その河には魚が登る。魚と果実の精が凝って、夷人が生じたのである。だから、いつも果実と蛙を食い、日本人が船を通じて米穀と魚とを

交易するので魚を積んで来る。(a)これによってたまには米穀の食を得ることはあるけれども、ふつうは果実と魚とだけを常食にしている。

その人品は、身長七、八尺あるいは六尺。松前近辺では五尺ぐらいである。猿の眼の色をしていて、人相は荒々しく、夫婦の愛念が深く、長寿である。しかしその心術はつたなく、金銀の通用がないので、貯蓄とか奢侈とかの欲念や邪巧がない。上下の支配がないので戦争もなく、奪ったり奪われたりの乱世もない。松前の方から侵犯や劫掠することがないかぎり、向こうがこちらへ貪りに来ることはない。こちらから侵犯したり劫掠したりするので蜂起が起こるのである。(b)これは夷人の私の罪ではない。聖人や釈迦の偽教・妄説がないので欲心というものがなく、金銀を与えてもこれを地に投じて用いることがない。(c)学問・文字の制作物もないから、その心は廉直である。

『日本の名著一九 安藤昌益』中央公論社 一九七一年

ここで叙述されている基本的な見解は、蝦夷人は心が非常に素直で全く欲心がない、心が廉直である、人間的に優れているというものです。それはなぜかという点、ここが昌益の真骨頂でして、儒教や仏教が入っていないからだ



図8 安藤昌益の墓

〔出典〕盛田総・長谷川成一  
編前掲書

言う。儒教や仏教が入ると人間が悪くなると。なんだかこれも大変なことですが、一方で昌益は、あまり耳慣れない言葉かもしれませんが儒医であり、儒学に対する造詣も非常に深い人間です。蝦夷人には金銀の通用がない。通用がないから貯蓄や奢侈といった欲念や邪巧がないと、(じ)の箇所にあります。自然の世を、どうも蝦夷の社会にあてはめて考えていたようです。しかし江戸時代は封建社会とはいえ、全国的な商品流通がすでにあったわけです。昌益が生きた一八世紀の半ば、宝暦年間には、商品流通や金融も発達し、世界でも有数の経済の発達した市場を持つ国家に成長していました。それを金融も商品流通もなにもなくしてというのは、これはもう全くのユートピア論にしかすぎなくなってきました。

それは別にしても、昌益は、蝦夷の人々には金の問題や支配、非支配の関係がもともと存在しないのだから、攻撃的になることがないのだと考えます。蝦夷の人々が和人を攻撃するのは、これはひとえに和人のほうに責任があり、蝦夷人を搾取したり攻撃的に取り扱うから、対抗してさまざまな反乱を起こさざるを得ないの言います。不当な収奪に対する彼らの蜂起であるという考え方です。

安藤昌益に対して、私は非常にネガティブにお話しているように聞こえるかもしれませんが、彼がなぜそのような考えたのかということを示します。昌益が生きた時代は、先程申しましたように一八世紀の半ばです。ちょうど一八世紀の初頭から、日本各地、特に東北地方は不作現象に悩まされます。小氷河期だという方もいるほどで、不作・凶作が次々に襲ってくる状況でした。その最たるものが天明の大飢饉ですけれども、それだけでなく、昌益が生きた時代の宝暦の飢饉も存在します。しかし昌益はそのなかで、もうひとつ、この八戸という地域からくる社会の特有の矛盾に直面します。それは「猪飢渴(いのししけかち)」と呼ばれるものです。

これは何かといえますと、八戸は大豆の特産地ですが、江戸では一八世紀に入りますと醤油の生産が非常に盛んに

なります。この醤油の生産が盛んになるにつれて、八戸が江戸の醤油市場の大切な材料供給源になります。もともと八戸南部の地域はご承知のとおり、ヤマセの常襲地帯ですから、米をつくるには、非常なリスクを伴います。それよりは、大豆を安定的に生産することによって江戸市場に供給する方がよいということで、作物の転換がおこなわれました。換金作物です。ただし、大豆を作っていく過程で猪が大量発生するという状況になった。私は、よく知りませんが、大豆は連作すると地力が落ちるといふことです。そうなるのと、増えた猪によって大豆が荒らされるのは勿論ながら、さまざまな穀物も荒らされ、果ては飢饉が生じる。これを猪飢渴というふうに呼んだといえます。ここに、昌益の考え方の原因の一端があります。それは何かといえますと、商品市場の発達によって人間の食べる米を直接作ることができず、大豆を作らざるを得ない。しかし大豆を作るのは、猪の異常な繁殖を招くことになる。従ってそこから飢饉が生じると。まさに、市場のために人間が飢えなければならぬ、こういう矛盾を昌益は目の当たりにしたのだと言われています。

そのメカニズムについては、異論もあって議論がなされて

いますが、山川出版社から昨年刊行しました『青森県の歴史』の中に書いておきましたので、この猪飢渴について興味のある方はご覧ください。

昌益は、八戸を去って後、彼の生まれ故郷の出羽国比内ひなに帰ります。図8にありますのが彼の墓で、大館市二井田おんせんじの温泉寺おんせんじにあり、大変小さいものです。参考のため掲げました。昌益の蝦夷地観については、以上です。

### 三 文化四年(一八〇七)「北の黒船事件」

—北奥羽各藩の蝦夷地出兵—

ここでは、「蝦夷騒動之書付写」という資料をもとにしてお話します。「北の黒船事件」というのは、文化四年(一八〇七)にロシアのフヴォストフらが、樺太、利尻それから択捉などで乱暴をはたらいた事件で、何年前かに、NHKの歴史番組のなかで取り上げられました。その時に、私もNHKのディレクターに相談を受けまして、いろいろ調査をして歩いた中で見つけた資料が、「蝦夷騒動之書付写」です。これは現在、史料を複写したものが北海道大学附属図書館の北方資料室に収められています。

〔資料3〕「蝦夷騒動之書付写」

(北海道大学附属図書館北方資料室架蔵本)

蝦夷騒動之書付写

津軽軍中より逃帰り候兵庫船乗組の船頭より申口聞書

(中略)

一、蝦夷地松前沖ニヲロシヤ国之軍船百五六拾艘備堅居候、此内大船百艘程、残りハ小船也、大船と申は人数壹万四五千、又は一万人程乗組、小船は五千人程之乗組と相見へ候、(中略)

一、(a)津軽・南部・江戸三ヶ所之御勢、津軽磯江陣を張、堅有之候処、六月六日ヲロシヤ船押寄既ニ上陸と相見へ候を、南部勢より石火矢数多打懸、ヲロシヤ船百人無程之小船ニ石火矢一放打中皆殺ニ相成、是よりヲロシヤ船一先引候ニ付、日本勢軍船押出双方より鉄砲打合申内、ヲロシヤノ方より海中ニ火竜と申ものを仕かけ、海上湯玉立、其内より火玉無透間飛出日本之軍船数面復り、即時ニ七百計人数及死亡候事、

(中略)

来書写

公儀より蝦夷地之風評御禁被仰付候而、只今は致沙汰候人も無御座候、然し内々実説承り候処、中々当分相静り

候とも相聞不申候、(b)南部・津軽之御同勢ハ余程之討死と相聞候、佐竹公之御同勢少し宜敷取沙汰御座候、公義人は役ニ立不申、小役勤候者共慾心強ク、ケ様之時分御用ニは相立不申、蝦夷一向ニ武之御備無之、右之小役之者共未練之働とも仕候、(下略)

九月十一日

極御内々御書付写

「津軽軍中より逃帰り候兵庫船乗組の船頭より申口聞書」という表題が示すとおり、船頭が話していたことを幕府側が書き留めたもので、文末に「極御内々御書付写」とありますように、全くの秘密にされました。幕府としては、絶対秘密にしなければいけなかった内容を含んでいました。

しかし、ここに書いてある内容は、歴史的な事実ではありません。(a)のところ、「津軽・南部・江戸三ヶ所之御勢、津軽磯江陣を張、堅有之候処、六月六日ヲロシヤ船押寄既ニ上陸と相見へ候」とありまして、フヴォストフのロシアの艦隊が津軽に敵前上陸してきたという話ですが、これは歴史的事実ではなかったと私は思います。弘前藩の藩庁日記はほぼ読んだつもりですけれども、ロシア軍が津軽半島に敵前上陸した話は、ついで弘前藩の公式記録には出てま

いりませぬ。

「津軽・南部・江戸」とありまして、弘前藩の軍勢、盛岡藩の軍勢、それから江戸というのは幕府の旗本・御家人で構成する幕府軍です。彼らが津軽の磯海岸に待ち構えていて、そこに阻止線を築いて、ロシアに向けて大砲を撃つたということですが、ここにはドラマチックに書いてあるので、「南部勢より石火矢数多打懸、ヲロシヤ船百人無程之小船に石火矢一放打中皆殺ニ相成」とありまして、一隻は敵前上陸してくるロシア側の船に大砲を撃って撃破したとあります。しかしロシア側から撃ってきたきた大砲の弾が、海中にドーンと当たってきて、それが、「火竜と申ものを仕かけ」ですね、「海上湯玉立、其内より火玉無透間飛出日本之軍船數面復」と、日本側は七百人の死亡に及ぶ大損害を受けたと書いてあります。

問題なのは、(b)のところですが。「南部・津軽之御同勢ハ余程之討死と相聞候」ですね、盛岡藩の藩兵と弘前藩の藩兵の戦死者が多かったと。「佐竹公之御同勢少し宜敷取沙汰御座候」、佐竹(秋田藩)の方はそれほど損害はなかったということですが、一方で「公義人は役ニ立不申」とあり、幕府軍は役に立たなかったということが書かれています。「小役勤候者其慾心強く、ケ様之時分御用ニは相立不申」

とあります。「蝦夷一向ニ武之御備無之、右之小役之者其未練之働とも仕候」とありまして、幕府の軍勢は上も下も戦争において役に立たないと記されています。風説とは言え、幕府の軍勢の評価がここに出てしまっているということとで、これは幕府にとっては大変な問題であったのですから、「極御内々御書付写」ということになりました。

皆様御承知のとおり、江戸幕府の最高権力者である將軍は、征夷大將軍です。征夷大將軍の職は、律令官制において令外官りょうぐわんですけれども、夷を征する大將軍ということですから、ロシアはまさに夷であり、その夷を征する將軍が開いた政務機関が幕府で、夷を征することこそ征夷大將軍の、そして徳川將軍の、最も重要な役割です。圧倒的な武力を持ち、そして夷を滅ぼす力があってこそ、征夷大將軍の權威を保つことができるのです。その圧倒的な武力を誇る筈の幕府軍は役に立たない。それから「小役勤候者其慾心強く」とありますから、実務に携わっている身分の低い御家人たちは、欲心ばかりで公に奉仕するという気持ちが全くないという。また、「蝦夷一向ニ武之御備無之」とありますから、アイヌ民族にも武力の備えがないとあります。したがって、幕府には夷を征するような圧倒的な武力を持ちえなかったことが、ここに暴露されかけたのです。

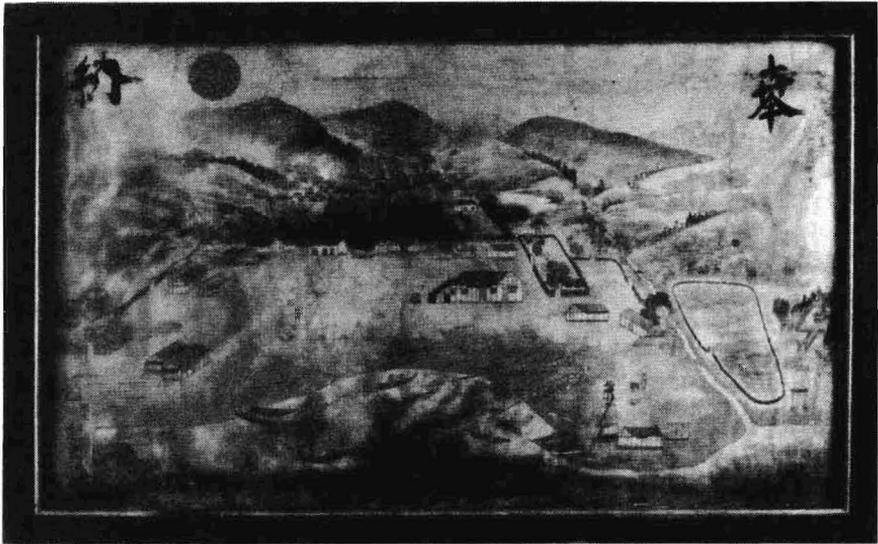


図9 蝦夷地・場所図(鯨地曳網漁図) 大石神社(風間浦村)蔵  
 [出典] 青森県立郷土館『図録 青森県の産業絵馬展』1993年

この「蝦夷騒動之書付写」には、この前後にまだかなりの記述があり、次のようなおもしろい記事も載っています。津軽の磯で日本の軍艦が撃破されたという噂が大きくなり、ロシアの軍艦が伊勢湾まで下って行くのではないか、さらに江戸も風前の灯になる、といった噂がたつようになる。またその時に、江戸にいた旗本・御家人が、質入れしていた古い武器を慌てて買い戻し、さらに金を借りまくって、急いで武器を集めるといったような醜態を演じた、など。約半世紀後、嘉永六年(一八五三)にペリーがやってきて騒動と混乱の極みに至ったのですが、それと同じ事が当時に起きました。ですから、文化四年の北の黒船事件は、ペリー来航、そして幕府崩壊の序章であり、幕藩体制崩壊の予兆とも言えるわけで、蝦夷地を介して不気味な未来を予想させる事態が生じたのでした。

#### 四 北奥羽と蝦夷地との交流

図9「蝦夷地・場所図(鯨地曳網漁図)」をご覧ください。これは青森県の下北郡風間浦村、大石神社にある奉納絵馬です。安政二年(一八五五)の請負場所での漁業労働を描いています。漁業労働に従事している人々それからアイヌの

コタンが描かれております。チセとよばれるアイヌ民族の住居もあります。場所を描いた絵図は珍しく、労働している姿まで描いていて、大変貴重なものです。この場所が蝦夷地のどこなのかよく分からないので、おわかりの方はお知らせいただきたいと思えます。アイヌ民族のコタンのすぐ側に場所が設置されていて、網をひいている姿があり、また油を絞る装置や焚いている姿も見えますので、鯨漁の漁場の絵だろうと思われまます。この絵については、もっと研究する余地があるのですが、お示しだけしておきたいと思えます。

このように、先程の下風呂の佐賀さんもそうですが、下



図 10 「獄中記」の表紙  
 [出典] 盛田稔・長谷川成一編前掲書

北半島の人々がかなり蝦夷地の漁場、請負場所に出て行きました。根室の請負場所などでは、下北半島の出身者が六八パーセントといわれていますし、天明の飢饉の際、天明八年(二七八八)に幕府の巡見使がやって来たときには、津軽側から松前へ飢饉のため人が流れてきて非常に困っている、といったことが書かれています。年に八百人程も津軽側から人々がやってくるということで、中には松前へ着くだけで精一杯、松前に着いてから八百人のうち二百人以上が飢えて死んでしまったという記録も残っています。津軽者であるという言い方をすると、松前の側は受入に非常に寛大であったということで、津軽からやって来た人間に対して米一升と錢百文を与えて帰国させたともいわれています。「しよっぱい川」を渡って来る人々に対して、津軽、南部を問わず、蝦夷地の側はそれを受け入れる懐が深かったようです。

そのような状況が、当時の東北の民衆にどのように考えられていたかということを、次の「民衆の蝦夷地観」というところで触れましょう。

## 五 民衆の蝦夷地観

—南部の三浦命助に見る—

三浦命助みうらめいすけという人物は大変な人で、幕末に南部地方なんぶの三閉伊へい一揆を指導した人物として、皆さんも御承知のことと思います。彼は捕まってから、「獄中記」という、日記というか記録を書きます。「獄中記」の表紙は、実際には「大福帳」あるいは「天下泰平國家安全」と書かれていて、「獄中記」というのは、岩手大学の森嘉兵衛先生が命名した名前だったと記憶しています。この記録は家族へ宛てて書いたもので、図10の表紙の添え書きにも、「一ばんてうめんなり、よくよくごらん」などとあります。

「獄中記」には、次のようなことが書かれています。

### 〈資料4〉「獄中記」

□上

一 ムカシノコトヲ申上候。日本一ノ大坂ノ御城モ落城オウシヤクニ相成リ申候。ヒデヒラノヤガダモ野山ト相成リ申候。ユワンヤ我我如ハ、ハヅルコトナカレ、クヤムコトナカレ。人ニマケテ、極楽世界ノ御地ニ御移可被成下候。松前程ノ御国ハ無御座候間、御移リ可被成下候。目出度申

上候。以上。

一 猶々申上候。何ニヨリソロバンヲオボエテ御移リ可被成候。以上。

一 天ハメグマセ玉ドモ、国守ノメグミナキユエニ、誠ニナンギ致ナリ。依テ然ルニ、折ヲ見合テ、松前ニ御移リ可被成下候。ヨグヲ離テ、童宮ノ御地ニ御移リ可被成下候。ヨクヲ離ルトキハ、極楽世界ニ移ラセ玉ウナリ。ヨグヲ離レテ御移リ可被成下候。以上。

〔日本思想大系五八 民衆運動の思想〕岩波書店 一九七〇年

「極楽世界ノ御地ニ御移可被成下候」、「松前程ノ御国ハ無御座候間、御移リ可被成下候」とあり、松前は極楽のような土地だという言い方をしています。また次に「天ハメグマセ玉ドモ、国守ノメグミナキユエニ、誠ニナンギ致ナリ」とあります。とにかく当時、幕末の盛岡藩は、ある意味では日本でも有数の困窮した藩で、いわゆる悪政を行ったということですから、このことは別に私が言ったのではなくて、他の本に書いてあったことです。何が悪政で何が善政なのかよくわかりませんが、藩札（藩の中でしか通用しない紙の貨幣）を乱発しまして、猛烈なインフレーションを引き起こします。経済政策の失敗、それに対して百姓一揆が起



図 11 大嶋小嶋之沖合に於る烏賊漁之景 八幡神社（本荘市松ヶ崎）蔵  
 [出典] 本荘市『松ヶ崎の民俗』1995年

こる。ところが立ち上がった百姓に、最初はいはい何でも聞きますよと言い、百姓一揆が収まった後になって、首謀者を捕まえて極刑に処すという、とんでもないことをやります。農民たちはもう南部領に居たくない、今度は仙台藩領に行きたいということまで言い出す。ある意味では、盛岡藩は面目まるつぶれといった状態にまで追いつめられます。

そうした一揆を指導したのが、三浦命助という人物です。三浦命助はここにありますが、「天ハメグマセ玉ドモ、国守ノメグミナキユエニ」という、まさに慈悲のない藩主、南部盛岡藩に対して、鋭い糾弾を行っています。そこで、「松前ニ御移リ可被成下候」、「竜宮ノ御地ニ御移リ可被成下候」、「ヨクヲ離ルトキハ、極楽世界ニ移ラセ玉ウナリ」と、妻子には松前へ移住するようにと、もうこんな所にもどうしようもないのだと言います。これはつまり、蝦夷地はアジール（避難地）であると言っています。圧政、飢饉、そして収奪から逃れるための、まさに避難所として、命助は蝦夷地を位置づけているということです。

先程、天明の大飢饉の際、津軽者といえば松前では受け入れに寛大であったこと、渡ってくる人々に米一升と銭百文を与えて帰国させるという処置をとっていたというお話

をしましたが、このアジュールという言葉から察するに、東北、特に北東北の人々には、以上述べたような蝦夷地のイメージが心の中の大きな位置を占めていたことは、間違いないであろうと思われる。

### おわりに

今までは近世の話をしてまいりました。さて、一番最初に、私は秋田県本荘市の出身であるという話を致しましたが、図11「大嶋小嶋之沖合に於る烏賊漁之景」という絵馬をご覧下さい。これは、本荘市の北側、松ヶ崎という地区の八幡宮に所蔵されている絵馬です。実はこの八幡宮は私の母の実家で、本荘市の文化財調査をしていた時に、この絵馬を発見しました。私自身は近世が専門ですので何とも思わずにいましたが、民俗の關係の方がこの絵馬を見まして、これはすごいという話になりました。母の実家に遊びに行ったときに子供の頃から見ている絵馬のはずなので、問題関心がないのでさっぱりわからなかったわけです。

この烏賊釣りの絵は、大正三年（一九一四）に松前町江良町村の和田秀江（直次郎）さんという方が描いたものであると記されています。描かれた場所は松前沖で、『松ヶ崎の

民俗』（本荘市史民俗調査報告書 第四集 本荘市編 一九九五年）からの受け売りですけれども、この中に描かれている山は岩木山だということです。ここにはまた、松前大嶋小嶋や蒸気船、烏賊を釣る道具も描かれています。烏賊を釣る道具などは、現物は残っていますけれども、作業風景が絵に描かれると、どのように使われていたのかがわかるので、非常におもしろいと聞きました。そしてこの船は、おそらく当時の松ヶ崎村から出稼ぎに行った人々が主体の船で、そのために絵馬として奉納されたものであろうと言われています。

松ヶ崎は、江戸時代には塩業と農業、塩農兼業の村でした。日本海沿岸、出羽国の方の村々は塩業が盛んな傾向がありました。一八世紀の中頃になると瀬戸内や塩の大量生産が可能になり、移入塩がどんどん入って来るようになります。そのため塩業が衰え、塩農兼業という生産構造が崩壊したために、松ヶ崎村では海に出て行くしかなかったのです。この村には、「山投げて海投げるな」という諺があったということが、『松ヶ崎の民俗』の中に紹介されています。すなわち、海からの恵みは絶対に捨ててはならないということです。結局松ヶ崎村では、宝曆以降移入塩が入ることによって塩業が廃れて蝦夷地への出稼ぎが非常に盛ん

になり、蝦夷地に定住した人々も相当いたと言われている  
す。

また、松尾芭蕉の『奥の細道』で知られている出羽国象  
潟（秋田県由利郡象潟町）のすぐそばに、塩越（しほこし同前）と  
いう港町があります。塩越は漁業を中心とした村で、ここ  
からも蝦夷地へ大量の出稼ぎが行っていました。寛政二  
年（一七九〇）に塩越に來訪した高山彦九郎の『北行日記』  
に、塩越町五〇〇軒余のうち三〇〇人ほどが松前稼ぎに出  
かけていると記されています。そうした状況を考えると、  
秋田県、出羽国の沿岸地帯、あるいは下北半島や津軽半島  
等からの蝦夷地への出稼ぎや移住によって、蝦夷地に関す  
るさまざまな情報もたらされていたことがわかります。  
三浦命助もまた、そうした歴史的過程で松前、蝦夷地に関  
する認識を深めていったのではないかと思うのです。

最後に、三浦命助の御子孫について触れたいと思います。  
三浦命助の御子孫は、維新後北海道に渡り、オホーツク沿  
岸の街に移住したと聞いており（札幌大学の桑原真人教授  
のご教示）、そうした動きの中には、蝦夷地に対する東北民  
衆の様々な考え方の反映があると思います。

領主のレベル、民衆のレベルといった様々なレベルでの  
蝦夷地との交流は、東北各地の人々の蝦夷地に対する認識

の問題等を含め、今後さらにつきつめて考えていかなけれ  
ばならない課題であると考えます。

長時間のご静聴、どうもありがとうございました。

（弘前大学人文学部教授）

本稿は、二〇〇一年二月二日、かでのる2・7で開催さ  
れた北海道立文書館主催の「文書でみる北海道史講座」で  
講演された記録に、補筆していただいたものです。